朝日新聞　大阪・兵庫版　2012年3月31日

歴史の現場をたどる旅。その時、一番おいしかったものが「これ」だった

韓国・済州島の出身者が多く住む大阪に、ふるさとの味を届けたい――。島の歴史をたどる旅を経て起業した兄弟が、「島外不出」のマッコリ（にごり酒）を売り始めた。

日本に届け 済州の味

▲韓国・済州島の生マッコリ▲「済州島の味を知って下さい」。〝島外不出〟の生マッコリを輸入・販売している中條朝さん（右）、暁さん兄弟＝大阪市生野区

中條さん兄弟「島外不出」のマッコリ販売

東京都在住の中條朝さん(29)、暁さん(23)兄弟。朝さんは東京経済大で法学を専攻。人権や日本の植民地支配を学ぶゼミに触発され、3年生を終えた2003年に、「歴史の現場に立つ」をテーマにした旅に出た。

東アジアを中心に世界20カ国を回るうち、いつの間にか、休学期間は4年に及んでいた。いざ卒業しても、就職先はそう簡単に見つかりそうにない。

「それなら、会社を始めて何かを売ろうか」

弟の暁さんと相談。2人のバイト代や自身の結婚式のご祝儀などをかき集め、卒業直前の08年12月、株式会社を設立した。

歴史をたどる旅で一番おいしかったものは何だろう。真っ先に浮かんだのが、済州島の東門市場で出合った生マッコリだった。

酸味があって、さっぱり。一般に販売されているマッコリとは違って加熱処理なし、甘味料なし。食事にも合った。

兄弟ですぐさま済州島に飛び、島内シェア99%という醸造元の社長に直談判。一度、二度と訪ねたが、品質管理の難しさを理由にすげなく断られた。社長は「第一、韓国本土にだって、出してないんだ」。

打ちひしがれて、持ち帰った生マッコリを飲むと、あまりのうまさに「もう一度、行こう」。200万円をかき集めて手付金がわりに持参し、冷蔵コンテナ輸送も提案。09年5月の四度目の訪問で、「それほど好きなら」と輸入を許してもらった。

戦前、大阪と済州島は連絡船で結ばれていた。一説には、島にルーツを持つ在日コリアン約8万9千人のうち、約5万人が大阪、約5千人が兵庫に住むとされる。冷戦下の韓国で島民約3万人が軍や警察に虐殺されたとされる1948年の「4・3事件」では、3千人が日本に逃れ、その多くが大阪で暮らすという。

その済州島で育まれた伝統の味を島外で販売できるのは、いまでも中條さん兄弟だけだ。

会社のある東京近辺でファンを少しずつ増やしてきた。次に目指すのは「本場」の大阪だ。2月に大阪市で開かれた焼き肉ビジネスフェアに出展したのを皮切りに、営業を始めた。

島ゆかりの人には、ふるさとの味を誇りに感じてもらいたい。ゆかりのない人にも味わってもらい、不幸な時代もあった両国を結ぶ懸け橋になれたら。そう願いつつ、今日も街をゆく。

問い合わせは、かめに商事（03・5842・3138）。名前の由来は、自宅でカメ2匹を飼っていた兄弟が、2人で始めた会社だから――。（日比野尋子）

済州島4・3事件

1948年4月3日、南朝鮮の単独選挙が南北分断の固定化につながると反発して武装蜂起した左翼勢力を、米軍政下の警察や軍が鎮圧した。鎮圧の過程で、無関係の島民も多数虐殺された。李承晩政権下で54年まで弾圧が続き、死者は3万人を超えるとされる。98年に金大中大統領が真相究明に着手、2003年に盧武鉉大統領が国の責任を認め、遺族らに謝罪した。